

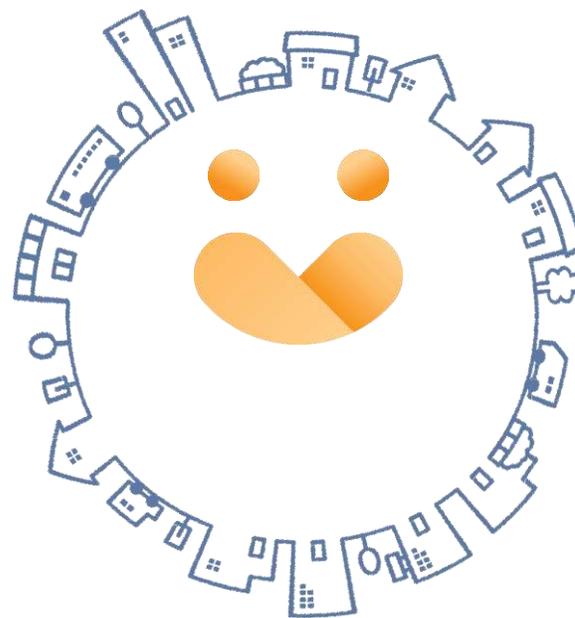
認知症に関する事業マネジメント研修会

当事者や家族の声をもとに施策展開している実例から学ぼう

さいたま市チームオレンジの取組

さいたま市いきいき長寿推進課

2024年1月11日



▲さいたま市チームオレンジロゴマーク

INDEX

目次

- ① **さいたま市の紹介、施策の概要**
- ② **さいたま市チームオレンジの検討の過程**
- ③ **今後の展望**
- ④ **おわりに**

① さいたま市の紹介、施策の概要

さいたま市の紹介



住みたいまちランキング

1	横浜	6	目黒
2	吉祥寺	7	新宿
3	大宮	8	品川
4	恵比寿	9	池袋
5	浦和	10	鎌倉

出典：SUUMO住みたい街ランキング2022関東版
(株式会社リクルート住まいカンパニー)

幸福度ランキング (政令指定都市)

1	浜松市
2	川崎市
3	さいたま市
4	京都市
5	名古屋市

出典：全47都道府県幸福度ランキング2022年版
(東洋経済新報社/寺島実郎/日本総合研究所/日本ユニシス総研)

人口	1,344,875人 (前年同月比+5,500人)
面積	217.43km ²
世帯数	640,062世帯 (前年同月比+8,637世帯)
平均年齢	44.99歳
高齢化率	23.23%
人口増加率	4.8% ※1
要介護認定率	18.2% ※2
日常生活圏域	27圏域 (行政区：10区)
主な地域資源	鉄道・うなぎ・盆栽・人形・スポーツ etc

令和5年12月1日現在

※1 平成27年と令和2年国勢調査から算出

※2 令和4年9月末時点



さいたま市を取り巻く状況

- 本市の高齢化率は、比較的低い傾向にあるものの、将来はその伸びが急激に増加することが予測
(2025年問題：「団塊の世代」が75歳以上 2040年問題：「団塊ジュニア」が65歳以上)

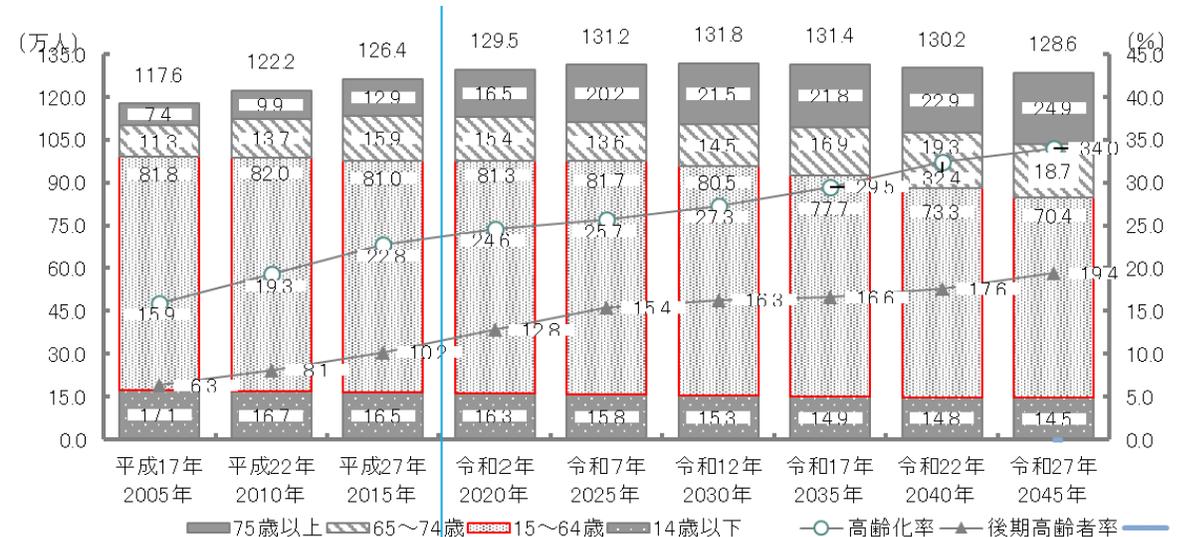
- 本市の政策の特徴は、単に医療介護サービスを充実する側面だけではなく、定年退職後や子育てが一段落した中高年齢層（おおむね50歳以上）から始まるセカンドライフの支援や、重度化を抑制するための介護予防の取組、要介護状態になっても住み慣れた地域で最後まで暮らすための、医療・介護・予防・生活支援・住まいが一体的に提供される地域包括ケアシステムなどを重層的に展開。

➤ 人口の見通し



資料 平成27(2015)年までは、「国勢調査」(総務省)に基づきます。
令和2(2020)年以降は、社人研から発表された推計値です。
※あくまでも過去の状況から推計されたものであり、今後の都市開発等の政策的要因を加味したものではありません。

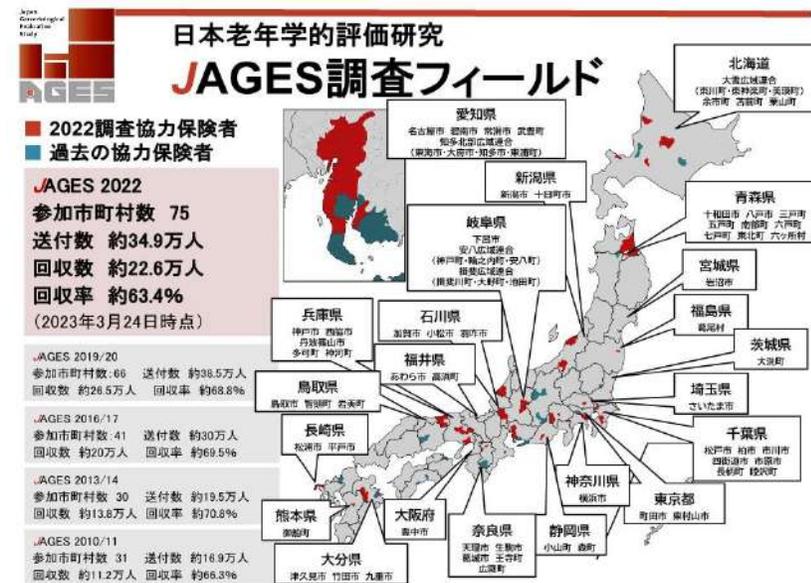
➤ 高齢者人口、高齢化率の見通し



健康とくらしの調査（JAGES2022） 調査①

- 全国比較で、さいたま市は総じて良好な結果を得た

指標名	年齢調整		指標名	年齢調整	
	なし	あり		なし	あり
フレイルあり割合	やや強み	やや強み	生活機能低下者割合	強み	強み
運動機能低下者割合	強み	強み	低栄養者割合	中位	中位
口腔機能低下者割合	強み	強み	閉じこもり者割合	強み	やや強み
認知機能低下者割合	強み	強み	うつがある者の割合	やや強み	やや強み
幸福感がある者の割合	やや強み	やや強み	SC得点・社会参加	強み	強み
SC得点・連帯感	中位	中位	SC得点・助け合い	中位	中位

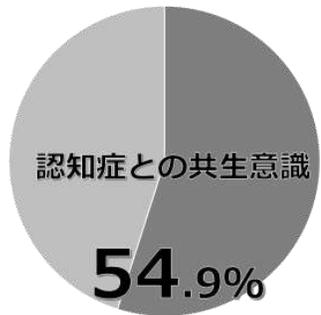


- 対象者 介護保険システムのデータから **無作為抽出** した **要介護認定を受けていない65歳以上** の市民
- 対象人数 **9,000名**
- 実施方法 **郵送** による 配布及び回収
- 調査期間 令和4年11月14日～令和4年12月5日
- 回収数 6,011通 (回収率66.8%) (未記入含む) (集計数5,921通)
[内訳]前期高齢者: 2,978通 (50.3%) 後期高齢者: 2,943通 (49.7%)
男性: 2,924通 (49.4%) 女性: 2,997通 (50.6%)

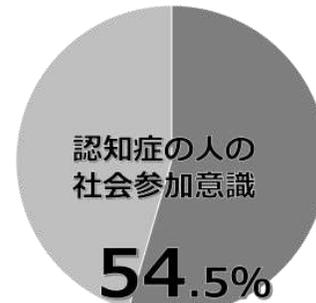
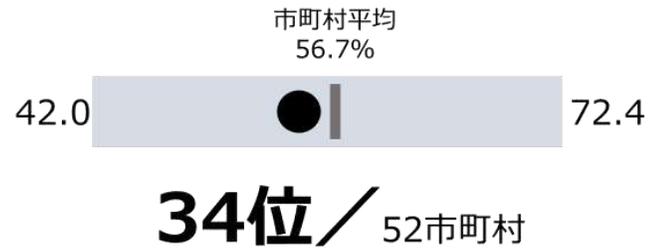
- 介護予防政策に必要な科学的根拠づくりやそれに基づく地域づくりなどに取り組む市町村と研究者による共同研究
- 3年に1度、介護保険者が行う介護予防・日常生活圏域二丁目調査を共同実施
- そのデータを活用し保険者の地域診断や科学的根拠づくり、国やWHOのEBPM（根拠に基づく政策形成）に活用

健康とくらしの調査（JAGES2022） 調査②

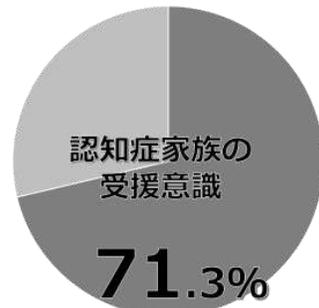
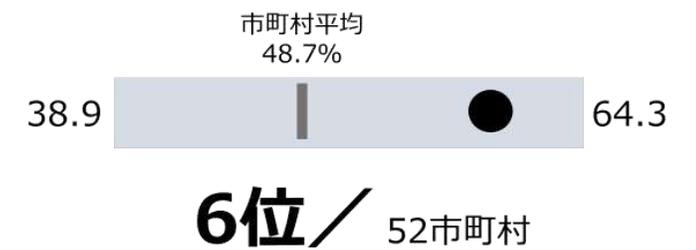
- 認知症にやさしいまち指標では、「認知症の人の社会参加意識」が平均より上位に位置



自分が認知症になったら、周りの人に助けをもらいながら自宅での生活を続けたいと思う人の割合



認知症の人も地域活動に役割をもって参加した方がよいと思う人の割合



家族が認知症になったら、協力を得るために近所の人や知人などにも知っておいてほしい人の割合

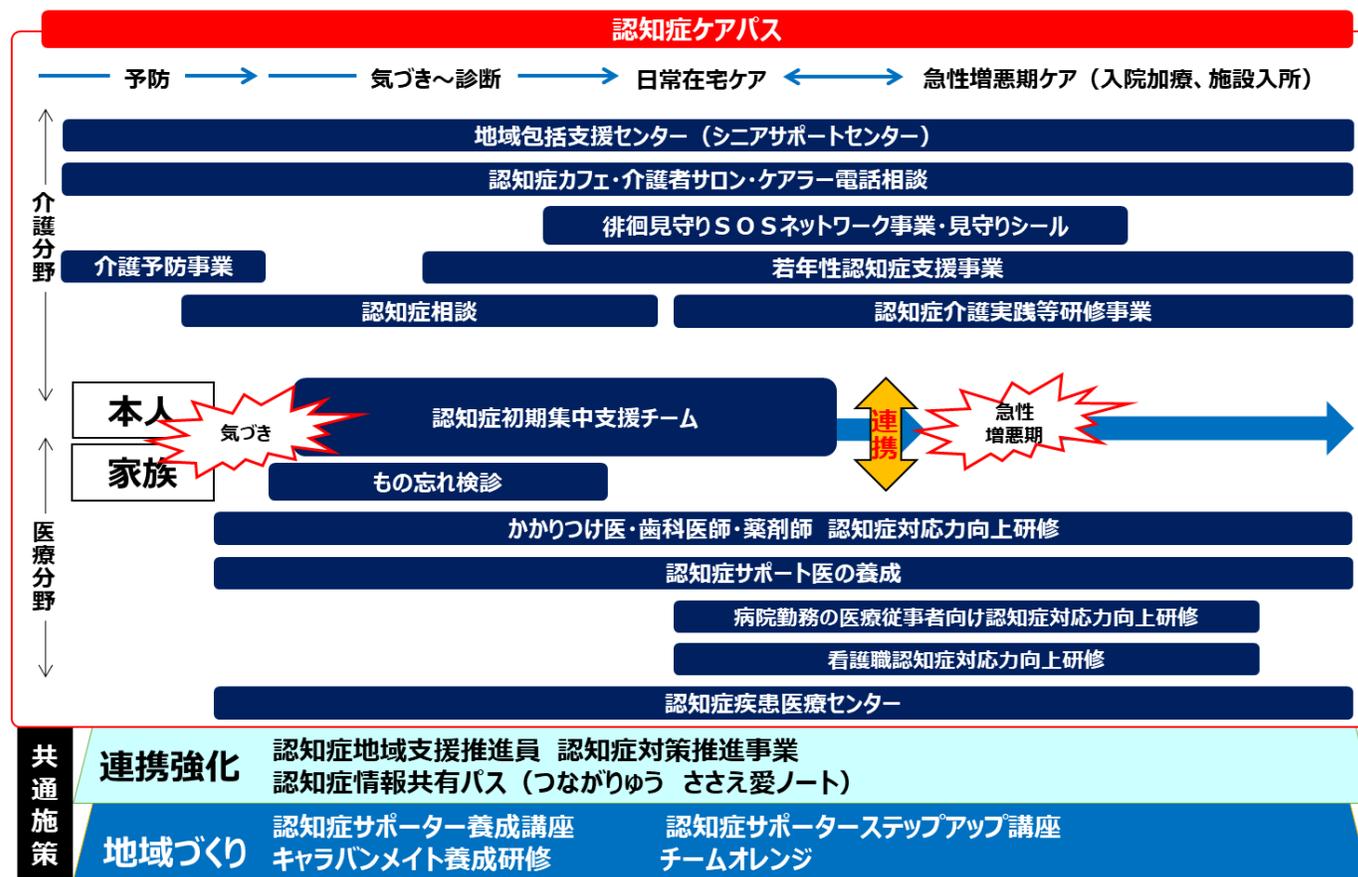


さいたま市の認知症施策の概要

- 近年は、若年性認知症サポートセンターの開設やもの忘れ検診の拡充、見守りシール事業の開始などに取り組む

さいたま市の認知症施策の概念図

時期	事業内容
H19年度	・ 認知症サポーター養成事業開始
H21年度	・ 認知症疾患医療センター運営開始
H27年度	・ 認知症地域支援推進員配置開始 ・ 認知症ケアパス公開 ・ 初期集中支援チーム事業開始
H29年度	・ ステップアップ講座（おれんじパートナー） ・ 養成開始
H30年度	・ もの忘れ検診事業開始（65歳以上隔年齢）
R 1 年度	・ 若年性認知症サポートセンター開設
R 3 年度	・ もの忘れ検診対象拡大（65歳以上の全年齢） ・ 認知症高齢者等見守りシール事業開始
R 5 年度	・ さいたま市チームオレンジ事業開始



さいたま市認知症施策推進計画

概要

- 認知症の人にやさしい地域づくりを一層推進し、さいたま市の認知症施策を総合的かつ計画的に推進していくため、「長寿応援プラン2023（第8期高齢者保険福祉計画・介護保険事業計画）」の一部として一体的に策定。
- 令和元年度に国が策定した「認知症施策推進大綱」の内容を踏まえ、4つの基本施策からなる
- 計画期間は令和3（2021）年度～令和5（2023）年度

基本方針

- 「認知症施策推進大綱」を踏まえ、4つの基本施策を柱とし総合的に認知症対策を推進します。

基本的な考え方

認知症の方の意思が尊重され、できる限り住み慣れた地域の良い環境で自分らしく暮らし続けることができるよう、認知症の予防から、重度の方への対応、その介護者への対応まで切れ目のない支援に取り組みます。

4つの基本施策

- 1 認知症に対する正しい理解の普及
- 2 認知症予防に資する可能性のある活動の推進
- 3 医療・ケア・介護サービス・介護者への支援
- 4 認知症バリアフリーの推進・若年性認知症の人の支援・社会参加支援



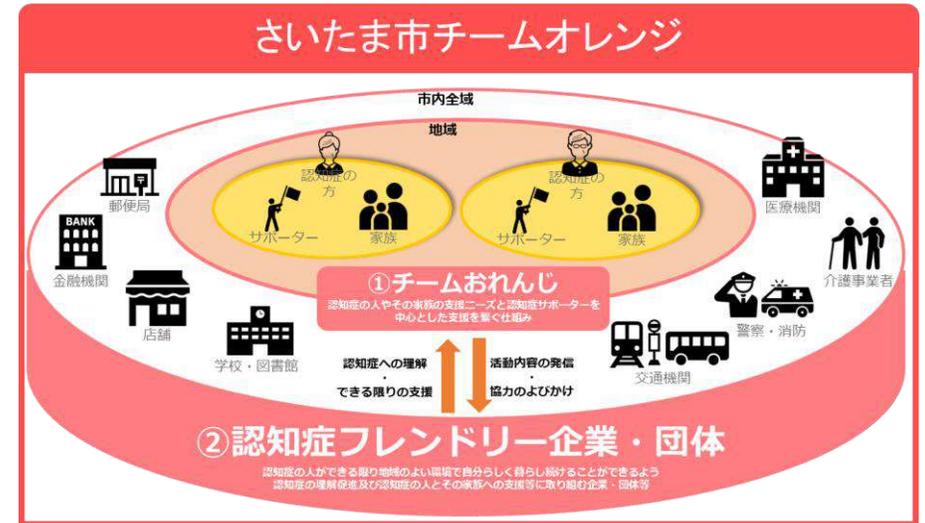
▲さいたま長寿応援プラン

② さいたま市チームオレンジの検討の過程

さいたま市チームオレンジ事業概要

▼概念図

- さいたま市版チームオレンジは、以下の2つの取組の登録制度を設け、**登録チーム・企業等の活動の支援やPR**を実施。
(令和5年11月から制度開始)



目的

取組

内容

制度

共生のまちづくり

認知症の人の
社会参加の場の創出

TEAM
① チームおれんじ

認知症の人とその家族及び
サポーター等により構成された
チームによる地域活動

登録

市による
活動の支援

多様な主体による連携
(認知症バリアフリー)

② 認知症フレンドリー
企業・団体

企業・団体等による
認知症への
理解と支援などの活動

登録

市による
活動のPR

検討の過程（令和4年4月～）

- チームオレンジの本格的な検討を令和4年度から開始

	時期	検討過程	工程
令和4年	4月	若年性認知症本人のカフェの参加 きっかけ①	
	5月	認知症地域支援推進員へのヒアリング きっかけ②	
	6月	認知症を取り巻く新たな社会像 きっかけ③	
	9月	認知症カフェ等活動調査	制度設計
	10月	市の考え方の提示 (認知症地域支援推進員連絡会・認知症の人にやさしい地域づくり推進委員会)	
令和5年	11月～3月	チームオレンジ検討ワーキングの開催	事業開始準備
	3月～6月	チームオレンジデザインプロジェクト	
	9月	アルツハイマーデー記念講演会	
	11月	さいたま市チームオレンジ事業開始	

若年性認知症本人のカフェへの参加 (令和4年4月)

- さいたま市が設置する若年性認知症サポートセンターで開催するカフェに参加
- 本人の集いの参加を通じて、(発表者自身の) 認知症の人への見方が大きく変わり、認知症の人が参加できる「楽しい場 (居場所) 」づくりの重要性を認識

埼玉県・さいたま市若年性認知症サポートセンター

※埼玉県・さいたま市の共同設置

若年性認知症支援コーディネーターを配置し、若年性認知症のご本人やご家族のほか、医療機関やシニアサポートセンター (地域包括支援センター) などの相談を受け付け。

若年性認知症支援コーディネーターの主な役割

医療機関

- 主治医と連携し日常生活について助言します。
- また、認知症サポート医などの情報を提供します。

社会保障 (経済的な援助)

- 医療費助成や障害年金など各種社会保障の情報提供をするとともに、手続きを支援します。

個別相談

- 本人や家族の不安な気持ちに寄り添い、症状や行動に対して助言します。

社会参加支援

- 若年性認知症の方のカフェを毎週開催しています。この他にも社会参加の場の創出に関して相談に応じています。

就労支援

- 職場との調整や再就職について助言します。

リンクカフェ (若年性認知症本人のカフェ)

- 若年性認知症支援コーディネーター事務所スペースで本人、家族、支援者が自由につどい過ごせる場
- 毎週1回開催
- 自分が好きなことを自由にできる時間・場所。
- 若年性認知症の本人が同じ立場で相談に応じたり、コーディネーターが相談に応じたりすることも可能。

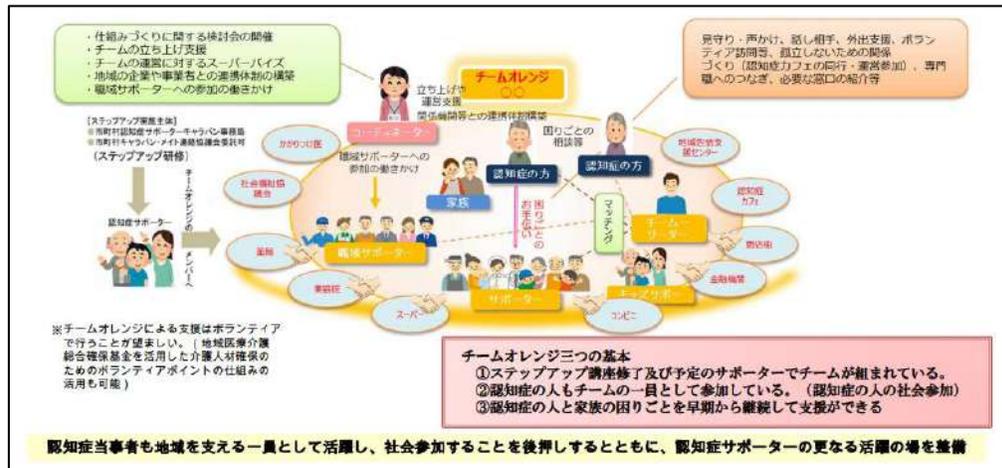


認知症地域支援推進員へのヒアリング (令和4年5月)

- さいたま市では各地域包括支援センター（27圏域）に認知症地域支援推進員を配置（兼務）

意見

- チームオレンジの仕組みとして理屈は分かるし、国が整備目標にしているからやらないといけないのも分かる。
- 一方、認知症カフェとの違いも分かりづらく、何のためにこれをやるのかが、腹に落ちてこない。そのため、目標だけ先行して設置を目指していくと、推進員も「やらされ感」がでるのではないか。
- この取組を進めるのであれば、「何のためにチームオレンジがあるのか」を整理したうえで、チームオレンジを通じて市はどのような「まち」を目指していきたいのかをきちんと提示してほしい。



- 「認知症と思われる初期の段階から、心理面・生活面の支援として、市町村がコーディネーター（※）を配置し、地域において把握した認知症の方の悩みや家族の身近な生活支援ニーズ等と認知症サポーター（基本となる認知症サポーター養成講座に加え、ステップアップ講座を受講した者）を中心とした支援者をつなぐ仕組み。

（※）認知症地域支援推進員を活用しても可

認知症施策推進大綱
KPI/目標

2025（令和7）年までに
全市町村に整備

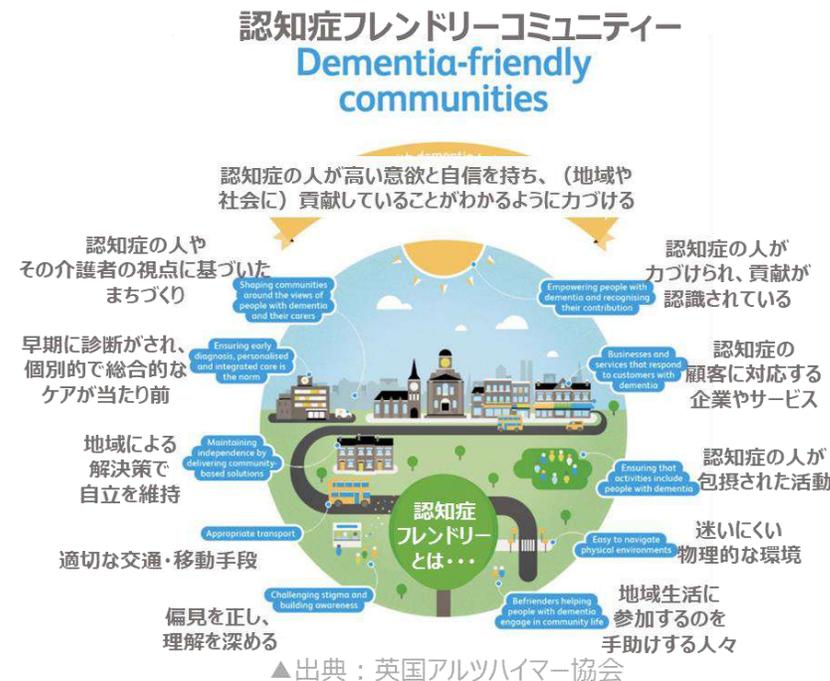
認知症を取り巻く新たな社会像 (令和4年6月)

- 認知症フレンドリー社会 徳田雄人 岩波新書,2018/11/20 210 p
- 認知症フレンドリーコミュニティ (英国アルツハイマー協会)
- 「認知症の人にやさしいまちづくりガイド セクター・世代を超えて、取り組みを広げるためのヒント」(国際大学 グローバル・コミュニケーションセンター 認知症フレンドリージャパン・イニシアチブ)
- 「認知症未来共創ハブ」の取組 など

いずれも認知症ご本人の声や体験等をヒントに、
社会環境側の変化を目指す考え方



ご本人とお話したとき・・・



世界的に認知症の人の増加が課題となる中、注目されるのが認知症フレンドリーコミュニティ(認知症の人にやさしいまち)という考え方です。取組が進む英国では、認知症の人や家族に対する全国的な調査を行い医療や介護の資源が充実しているだけでは、認知症の人がいきいきと暮らすことはできず、その人たちをとりまく社会環境の側が変化しなくていけないという問題意識に立って取組が行われています。

認知症カフェ等の活動調査 (令和4年9月)

調査から分かった主な課題

- 本人の参加が平均値で1.35人となっており、思うように本人参加が進んでいない。
- メンバーも固定化する傾向にあり、本人含め参加者全体が増えないことに課題を感じているカフェが多い。
- (包括などの) 職員以外のスタッフにお客様感がでるなど、ボランティアスタッフの自立化に課題を感じるカフェが多くある。

カフェ運営の課題への対応としてのチームオレンジの役割

◆ チームオレンジ構築に向けた関連活動状況調査結果 (令和4年8月末現在) (包括を中心にカフェ運営者を対象に調査を実施)

➤ 運営形態

開催形態	カフェ数
実地開催	46
オンライン	2
総計	48

➤ 運営状況

運営中状況	カフェ数
運営中	26
休止中	22
再開の目途あり	4
未定	18
総計	48

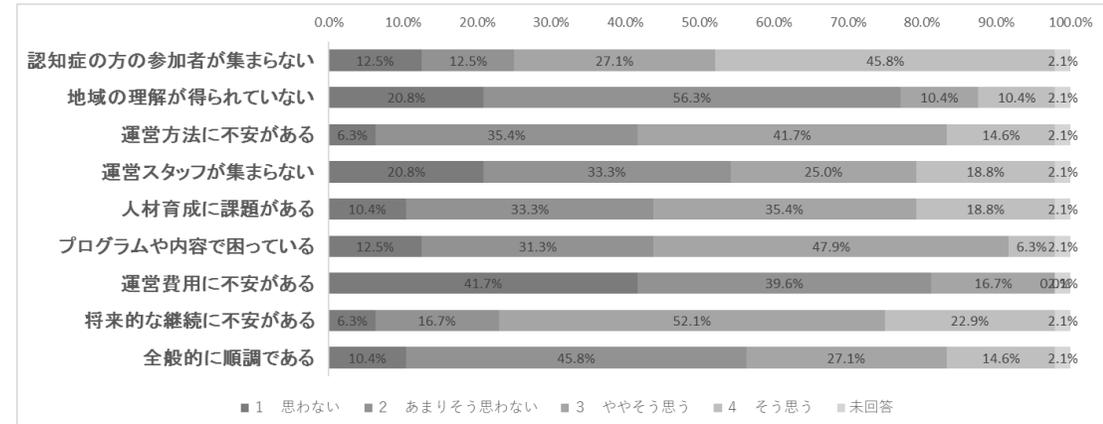
➤ 参加者の属性

参加者属性	参加者数 (平均値)
本人	1.35
家族 (介護者)	1.04
地域住民	6.2
専門職	0.68
その他	0.04
合計	9.31

➤ 本人の役割

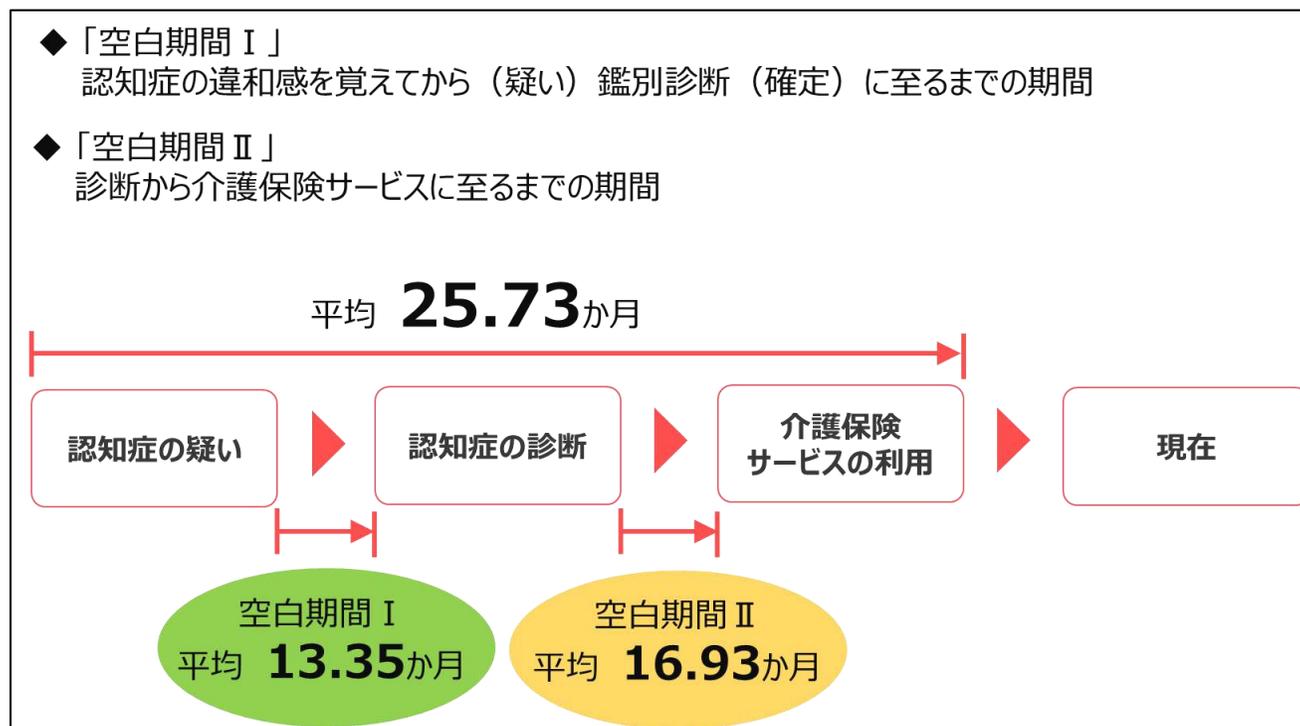
役割	カフェ数
主に参加者として	22
役割を持ってもらう	1
その両方	1
総計	24

➤ 運営上の課題



政策課題①

- 認知症の違和感を覚えてから、鑑別診断を経て、介護保険サービスの導入至るまでの期間は、平均**25**か月（空白期間）
- 認知症と思われる初期の段階から、**介護保険サービスに依らない心理面・生活面の支援の仕組み**として、チームオレンジの取組が期待される。



- 「空白期間」とは、認知症の早期診断の必要性が高まる一方で、初期段階であることから支援の必要性が理解されにくく、十分な支援を受けられない期間をさす。
- この空白期間に社会的孤立が進み、本人の生活の質（QOL: Quality Of Life）を下げる結果となってしまう現状がある。
- 介護サービスなどの利用が限られる時期であるため、空白期間の解消は優先度の高い政策的課題になっている。

出典：社会福祉法人東北福祉会認知症介護研究・研修仙台センター（2018）「認知症の家族等介護者支援に関する調査研究事業 報告書」（認知症未来共創ハブ作成）

政策課題②

- 認知症の人の視点に立った生活課題は、医療・介護だけではなく、様々な領域で存在
- 認知症の人の質の高い生活の維持（様々な障壁の解消）には、日常生活に接点のあるサービスや製品を提供する**多様な主体（企業や団体）との連携が不可欠**

課題・ニーズの整理マップイメージ

※赤色は認知症特有・青色は認知症特有ではないもののイメージ

- 認知症の人にとっての生活課題・ニーズのみを抽出し、5階層（自己実現・経済活動・社会性・生活基本要件・生理的要件）に整理。

	健常（加齢に伴う軽度の認知機能低下を含む）	軽度認知障害（MCI）	軽度～中等度認知症	重度認知症
遊・学（自己実現）	自己啓発（読み書き・学習等） 娯楽			
金・買・働（経済活動）	資産運用（備え）	お金の出し入れ（金融） 購買活動	就労	相続 貯蓄・資産管理
移・交（社会性）	交友・対人関係 移動手段（各種交通機関の利用等） 運転		目的地到達	会話
衣・食・住（生活の基本要件）	衣食の自立 快適な住まい		衣食支援（在宅） 住まいの維持・管理	介護施設
健（生理的要件）	予防		診断・医療 通院・服薬	医療・介護

(注：認知症未来共創ハブの当事者インタビューに基づき11の生活領域・180の生活課題を参考に作成)

ステークホルダー毎の課題の特徴

認知症の人との接点が想定される業界・団体

- 地域（生活に関わる事業者・団体等）にとっての介護課題・ニーズをマップ上に整理。認知症の人のあらゆる生活課題との接点において関わりがある。→**ケーススタディを作成**

	健常（加齢に伴う軽度の認知機能低下を含む）	軽度認知障害（MCI）	軽度～中等度認知症	重度認知症
遊・学（自己実現）	民間サービスが主 スポーツ・エンタメ、文具、図書館・博物館、IT、新聞・放送、旅行・宿泊、美容			
金・買・働（経済活動）	民間サービスが主 生保、電子決済、飲食、損保、雇用主、銀行・信託、弁護士・成年後見、貯蓄・資産管理			
移・交（社会性）	民間サービスが主 航空・旅客船、鉄道、関係、公民館、目的地到達、移動手段、通機関の利用、タクシー、自動車・道路、運転			
衣・食・住（生活の基本要件）	民間サービスが主 アパレル、ガス・水道・電気、警備・住宅管理、衣食支援（在宅）、マンション住宅、不動産・賃貸			
健（生理的要件）	公的サービスが主 予防、診断・医療、医療機関、介護施設、通院・服薬、薬、地域ケア			

検討ワーキングの過程 (令和4年1月1日～令和5年3月)

● 認知症地域支援推進員を中心とした検討WGを立ち上げ、全4回開催

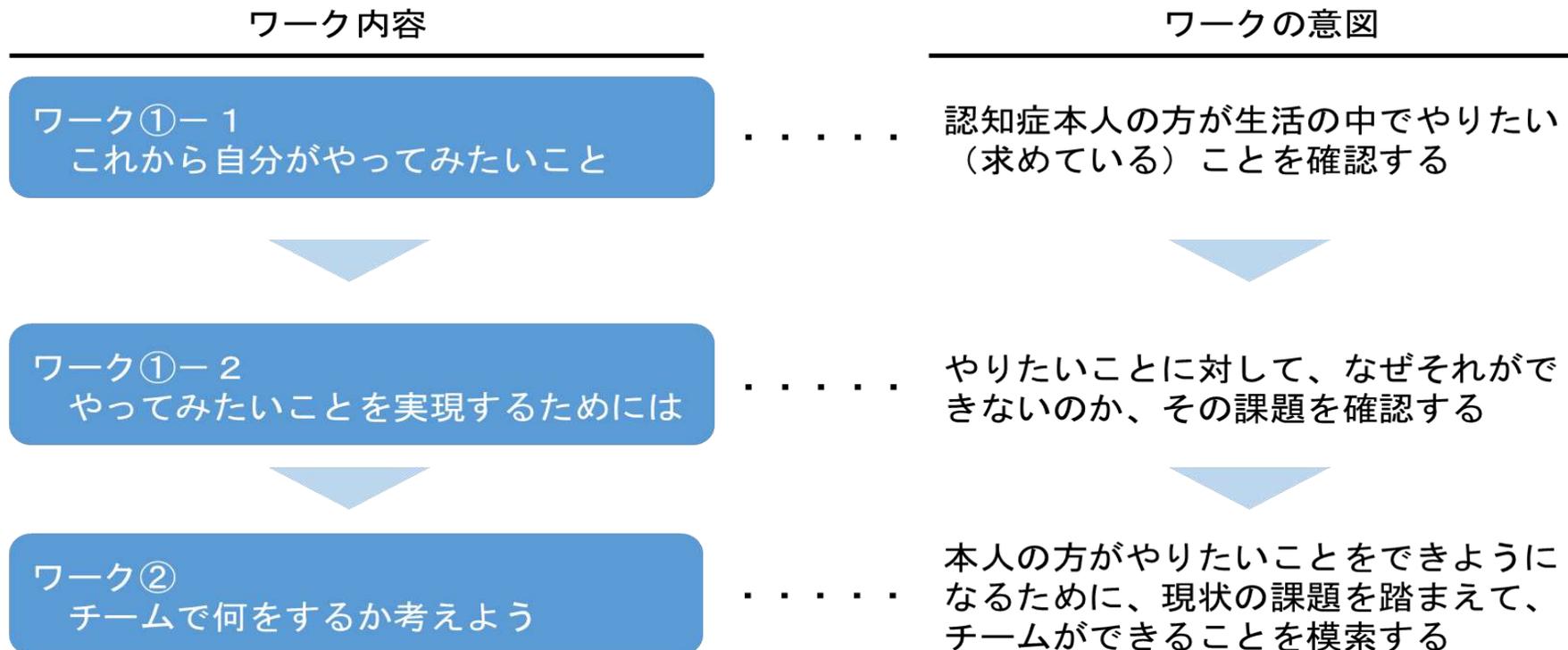
※第3回目については、当事者、家族、おれんじパートナー（ステップアップ講座修了者）なども参加

回数	開催時期	主な内容
1回目	R4, 1 1	・ 「認知症当事者」の意見を出発点にして検討することを確認
2回目	R4, 1 2	・ 認知症当事者も含めたWGの開催方法を検討
3回目	R5, 1	・ 模擬的なチームオレンジの立ち上げの過程を、グループワークを通じて体験、共有
4回目	R5, 3	・ 第3回目を受けた今後の展開の仕方を検討

第3回目WGの概要①

- 当事者6名 当事者家族3名 サポーター5名 推進員等関係者12名が参加
- 3グループに分け、模擬的なチームの立ち上げの過程を、ワークショップ形式により進行

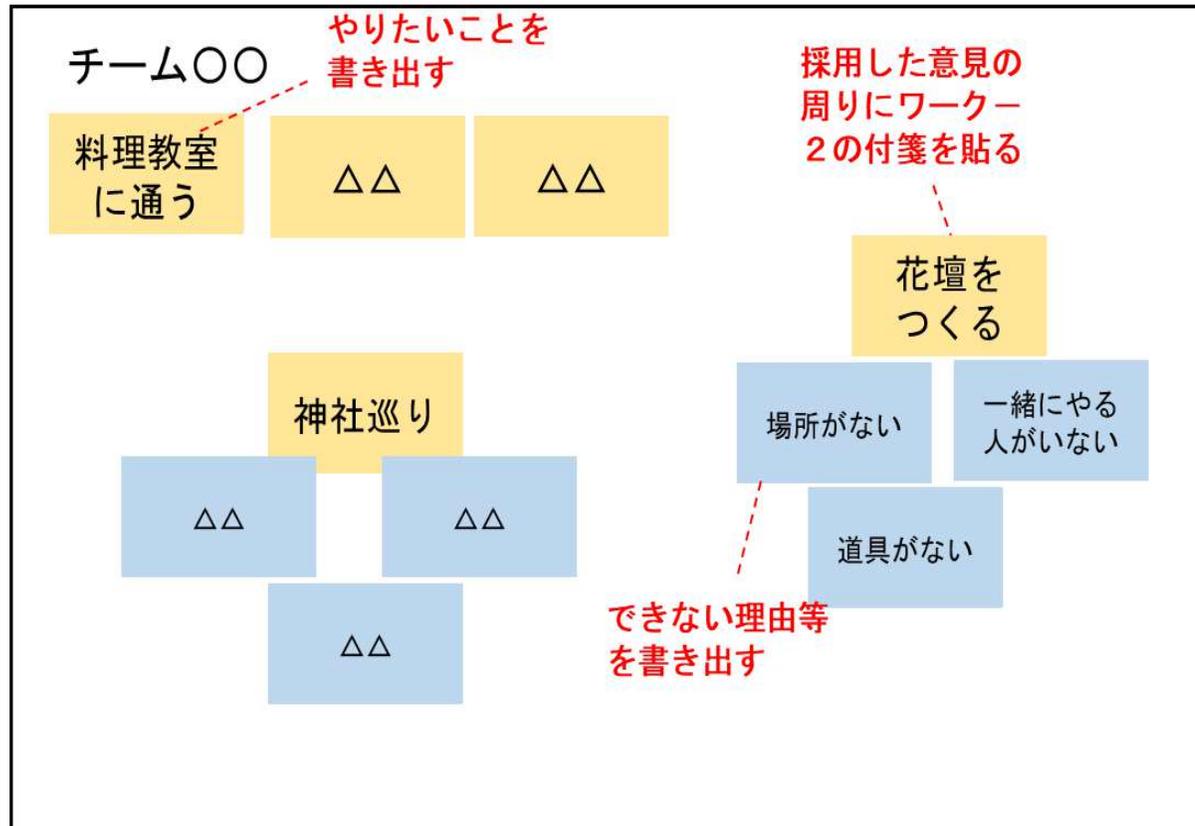
ワークの テーマ



第3回目WGの概要②

ワーク①-1) これからやりたいこと -2) やりたいことを実現するためには

模造紙②



【ポイント】

<ワーク①-1>
やりたいことを書き出し、模造紙上部に張り出す

採用する意見が決まったら、その付箋を模造紙中央付近に張り出す

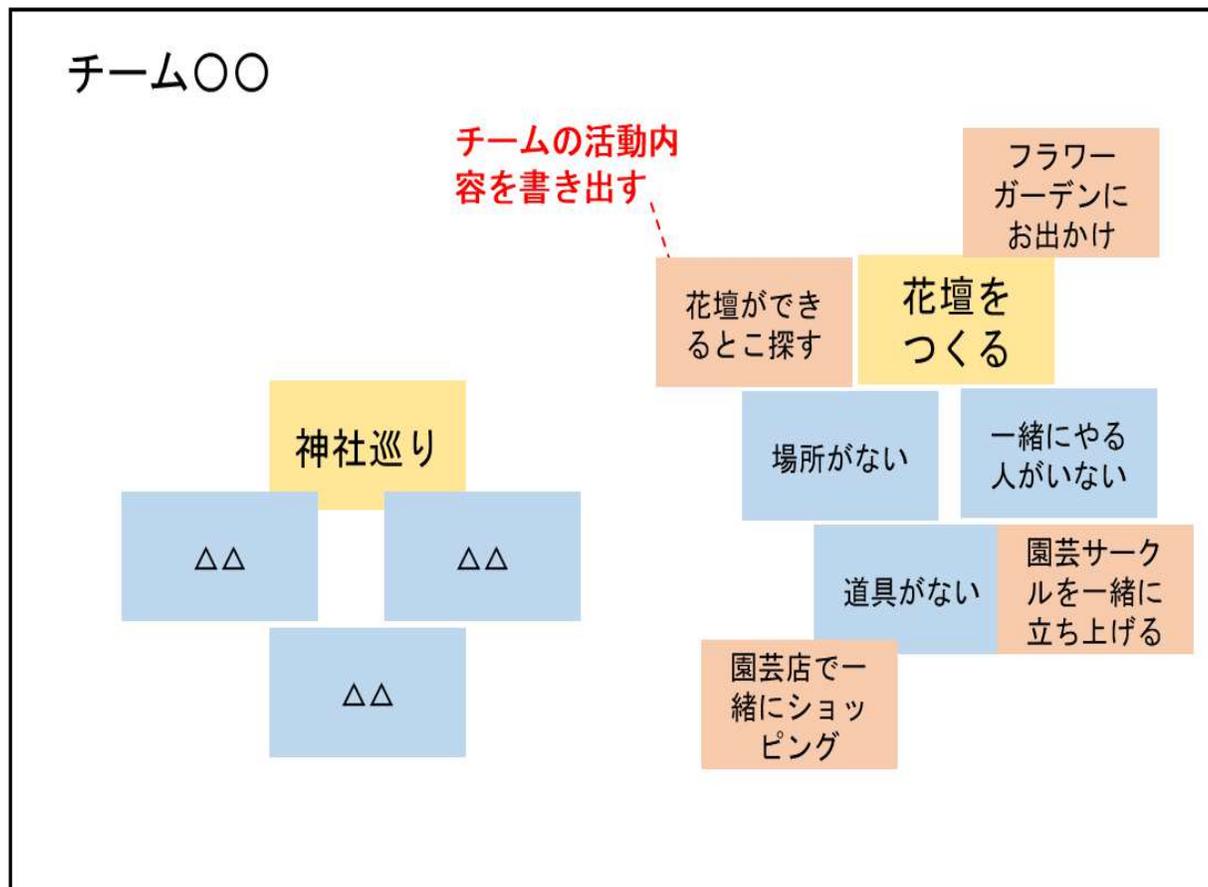
<ワーク①-2>
ワーク①-1で採用した意見の付箋の周りにワーク①-2で書いた付箋を貼りだす

※ワーク①-1とワーク①-2は別の色の付箋を使う

第3回目WGの概要③

ワーク② チームで何をするか考えよう

模造紙②



【ポイント】

ワーク①での付箋の周りにチームの活動内容を書き出す。

※スペースが足りない場合は、別の模造紙に張り替えても可

第3回目WGの主な意見感想①

- ・ 来る前は恥ずかしかったが、来てみてよかった。気持ちが出せて楽しい1日だった **(当事者)**
- ・ 小さいころ習いたかったができなかったことを、今でもやりたいという気持ちが残っている **(当事者)**
- ・ 以前に圏域の認知症サポーターの自宅で、認知症サポーターで支援していきたい方々の打合せを行った。その時に自分も介護者として、認知症の夫を連れて参加した。過ごしやすく、デイサービスとは違う集まりだった。そのイメージがチームオレンジと思っている。 **(サポーター)**
- ・ ワーキングなのではないが、役所的な会だったと感じた。認知症の方や家族が緊張せずに行われる場づくりが大切だと思う。 **(サポーター)**

第3回目WGの主な意見感想②

- ・ 検討の場で自分の意見が尊重されていることが当事者にとって大切と分かった **(推進員)**
- ・ 「チームを作るんだ」と形式ばらず、自然な形で取り組めるのが理想（ただしファシリテーター的な人は必要で、それが認知症地域支援推進員では？） **(推進員)**
- ・ 地域で（本当は圏域が良いが、せめて区内か、区をまたがっても生活圏域が同じところで）認知症の当事者を中心に話し合いたい。集まる当事者や家族によって全くやるのが違ってても対応できるフレキシブルなチーム作りを目指すが良い。 **(推進員)**
- ・ 市の全体では大きく集まりにくいので、区ごとぐらいの単位のチームオレンジでご本人様と家族、おれんじパートナーさん同士の交流の企画があればと思います。安定してご本人様の参加が増えてきたら包括単位ぐらいにするなどしてはどうかと思います。 **(推進員)**
- ・ 来てよかった・行きたくなる場所を作るのがチームオレンジだと思う。きっかけづくりが大切。ぜひ地域でも同じ場をそれぞれで作ってもらえたら。 **(当事者団体代表)**

4 回目WGで示された方向性

チームオレンジの構築の考え方

- チームオレンジは、認知症本人や家族のニーズに応じて、**多様な形態や活動範囲**が考えられる。
- チームの設置を目的にするのではなく、**認知症本人の希望や思いを聞くことを出発点にすることを原則**とする。
- **本人とサポーターがその実現のために一緒に「やってみたいこと」を考える**ことで、チームそれぞれの活動の目的や内容を模索しながら、チームの構築を目指していく。
- この取組にあたっては、認知症カフェ等の既存資源の活用や本人MTの開催などによる、認知症本人と認知症サポーター等が交流する企画を通じて、チームの結成につなげていく。

チームオレンジデザインプロジェクト (令和5年3月～6月)

- さいたま市チームオレンジのロゴマークを**認知症の人本人で構成されたワーキングチーム**から頂いた意見を基にデザイン。

ワーキングチームから頂いたご意見

○ロゴに込めたい想い

- ・やれることはやりたい (失敗しながらでもやりたい)
- ・やりがいや目標をもって、日々生活したい
(生活の中でちょっとした成果が欲しい)
- ・少しずつでも周囲や社会に理解してもらいたい
- ・「助ける」、「助けられる」ではなく、補う関係性になりたい
- ・認知症じゃない人と同様、認知症の人も色々な個性がある

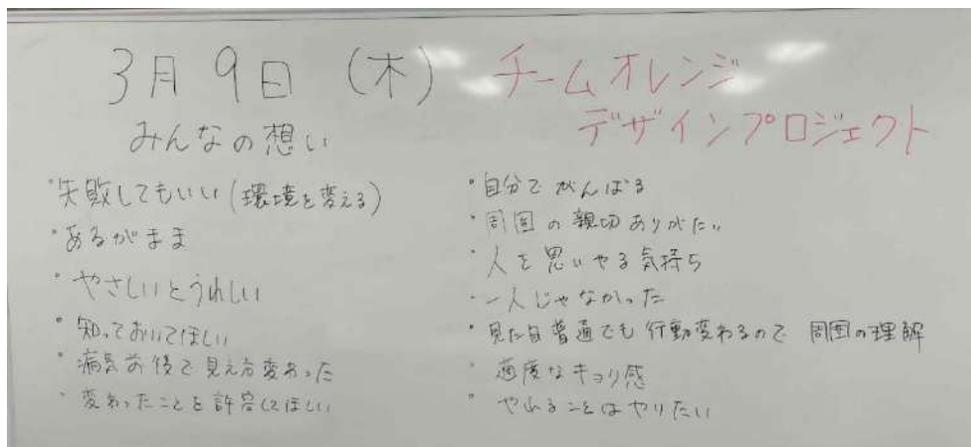
○モチーフ

形のイメージ (楕円・不定形) → 調和、やさしさ、多様性

パズルのピースのような重なり合い → 補う関係性、お互いを理解した瞬間、
いまできていないものができていく過程
→ 同じ目標を持ち、社会を共に創りたい

○テーマカラー

・オレンジ (暖色系) → 温かみ、人間味



▲ワーキングチームの様子

さいたま市チームオレンジロゴマーク

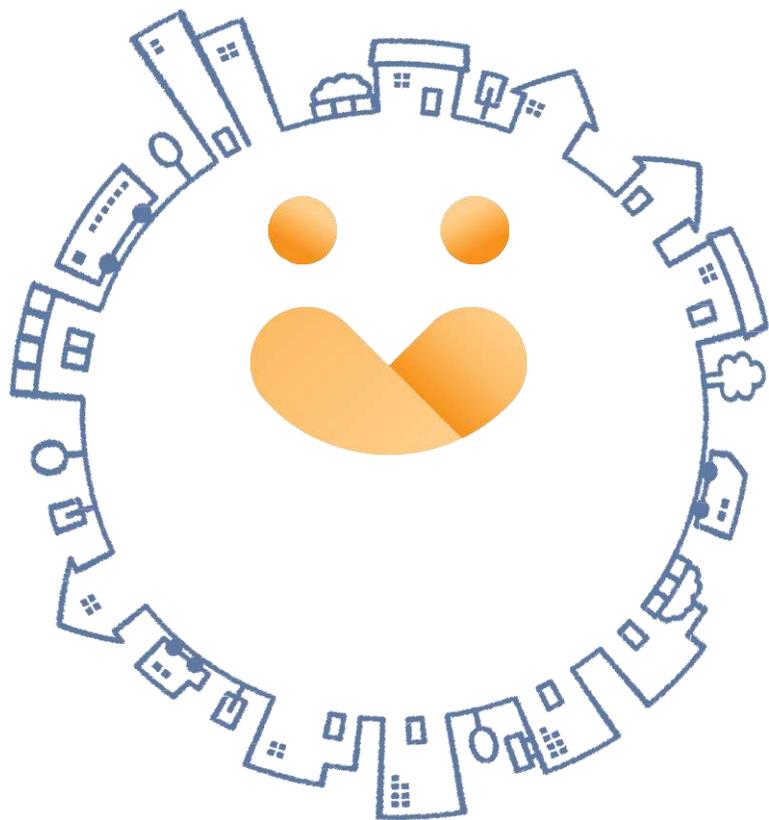
コンセプト

「人（目と口）」:

認知症の人も含めてまちで暮らす人々が、お互いを理解し、寄り添いながら、補い合いあう様子が描かれています。また、その様子が人の顔にも模され、笑顔になっています。

「まち（顔）」:

中心の人を囲む「まち」が円状に描かれ、顔の形にもなっています。認知症の人も含めた人々が、まち全体で、「共生」や「共創（まちづくり）」する様子として描かれています。



▲さいたま市チームオレンジロゴマーク

アルツハイマーデー記念講演会 (令和5年9月)

概要

日時：令和5年9月9日（土） 参加者数：297名（後日オンライン配信あり）

主催：認知症の人と家族の会埼玉県支部 共催：埼玉県・さいたま市



▲ 動画配信先

目的

- 認知症の人が多く暮らす時代において、認知症とともに生きる方々が安心して過ごせる社会を実現するためにどのようなことが必要なのか、当事者の視点を交えながら、市民の皆さんとともに考え、共有していくことを目的に開催

プログラム

内容

講演の意図

第1部 基調講演

認知症とともによりよく生きる未来とは
講師：堀田聡子氏
(慶應義塾大学大学院教授／認知症未来共創ハブリーダー)

これからの時代の認知症とともによりよく生きる未来（社会）の在り方について、参加者に提示、共有

第2部 事例発表

認知症の本人を中心とした地域づくり
～チームオレンジの活動事例から～

本人を中心としたチームオレンジがなぜ地域に必要なのか、チーム事例を通して学ぶ

第3部 特別座談会

堀田聡子氏と認知症の本人との座談会

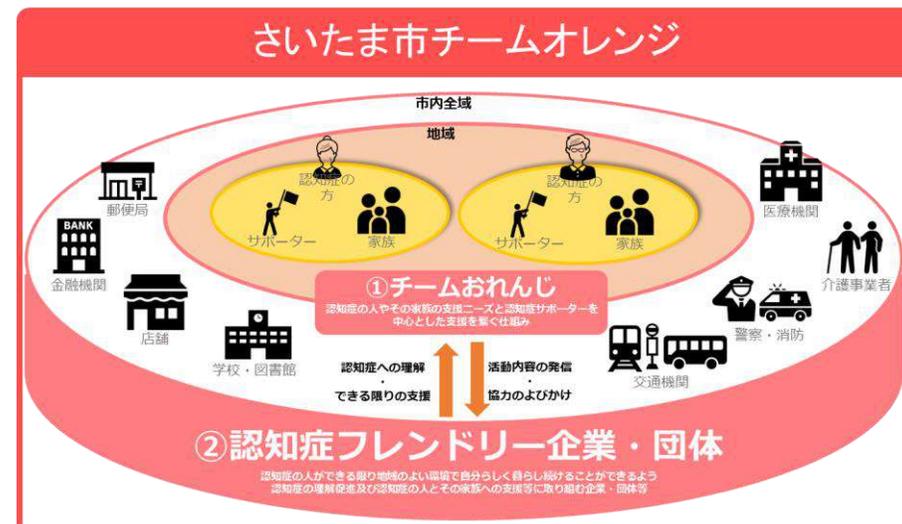
認知症の方本人の日々の生活の過ごし方やその中で感じている想いを、座談会を通して会場全体で共有し、認知症の方の本人の想いを地域づくりに生かすきっかけづくりにする



さいたま市チームオレンジ事業概要

▼概念図

- さいたま市版チームオレンジは、以下の2つの取組の登録制度を設け、**登録チーム・企業等の活動の支援やPR**を実施。
(令和5年11月から制度開始)



目的

取組

内容

制度

共生のまちづくり

認知症の人の
社会参加の場の創出

TEAM
① チームおれんじ

認知症の人とその家族及び
サポーター等により構成された
チームによる地域活動

登録

市による
活動の支援

多様な主体による連携
(認知症バリアフリー)

② 認知症フレンドリー
企業・団体

企業・団体等による
認知症への
理解と支援などの活動

登録

市による
活動のPR

取組の柱 1 チームおれんじ①

- 認知症の人とその家族及びサポーター等により構成されたチームによる地域活動
- 認知症の人の「希望」や「困りごと」に耳を傾け、本人と一緒に「やってみたいこと」を実践する地域活動



「支援する人、される人」という関係を乗り越え、認知症の人と同じ地域のパートナーとして、自分らしく安心して暮らせる地域づくりを進める

活動の様子



▲認知症当事者によりハーモニカ演奏



▲集合写真

活動例



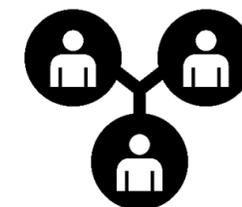
居場所（集う場）づくり
（認知症カフェ、本人交流会
常設サロン等の開催）



見守り、生活・移動支援
（外出支援、見守り活動、話し相手、定期訪問など）



学習・運動、趣味活動



相談をつなぐ
（各種支援サービスの調整）

チームおれんじ②

登録要件

1. 本市に所在地を有し、又は活動の拠点があること
2. 所属するメンバー 1 名以上が、本市が主催する認知症サポーターステップアップ講座を受講している、又は受講する予定であること
3. 認知症の人もチームの一員として、認知症の人本人が主体的に参加できるように努めていること

登録事項

- チームの名称、代表者氏名・連絡先、活動場所、活動内容、チーム員数など

申請先

- 各区役所高齢介護課
(申請書の様式はさいたま市ホームページからダウンロード可能)

立ち上げの流れ (例)

① 認知症の人の「やってみたいこと」の確認

認知症本人や家族との対話を通じた希望や困りごとの発見

② 活動内容と結成の意向の確認

本人や家族と一緒に「できること」を考え、チームとして活動の目的や内容を決め、チーム結成の意向をチームオレンジコーディネーターに報告

③ チーム員の構成とチーム名の決定

他にもチーム員の成り手がいるか確認し、チーム員の構成とチーム名を決定
(必要に応じてリーダーを選出)

※認知症の人や認知症サポーターのほか、地域の協力者など、誰もが参加可能

④ チームおれんじの登録

さいたま市チームおれんじ登録申請書を作成し、各区高齢介護課へ提出

啓発品 (チームおれんじ)



▲登録証



▲Tシャツ



▲スペシャルリング



▲チームオレンジバッジ

取組の柱②「認知症フレンドリー企業・団体登録制度」

- 認知症への理解及び支援、認知症の人が利用しやすいサービス・製品開発、環境整備などを実践
- 市が登録を行い、その活動・発信を通じて、認知症と共生するまちづくりに寄与することで、企業・団体の価値を高める取組のこと。

- まち全体で認知症と共生する社会活動を展開する
- 認知症の人とその家族が「社会と共に生きている」と実感できる社会的雰囲気醸成

実践例



◀ 従業員向け講座



企業による美容健康講座▶

登録要件



1 認知症サポーター等の
「人材育成」

従業員などに対し認知症についての正しい理解を促し、認知症本人の立場に立った、接客・サービスの提供につなげます。



2 チームおれんじなどの
「地域連携」

認知症に関連した地域活動などを支援し、地域との連携を深めます



3 認知症をサポートする
「社内制度」

企業・団体内において、認知症本人が安心して継続的に働き続ける社内制度を設けることで、企業に対する信頼性が向上します。



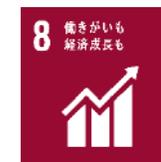
4 認知症の人が利用しやすい
「サービス・環境整備」

認知症の人の意見を取り入れたサービス・製品の開発により、潜在的な利用者・顧客のニーズを把握することができる

SDGsのターゲット



3 すべての人に健康と福祉を



8 働きがいの経済成長も



11 住み続けられるまちづくりを



17 パートナシップで目標を達成しよう

認知症フレンドリー企業・団体登録制度②

対象となる企業・団体

- 市内に事業活動を展開する企業又は団体等（公共サービス機関等を含む。）
- 業種・規模は問わず、店舗や支社・支店単位でも登録可

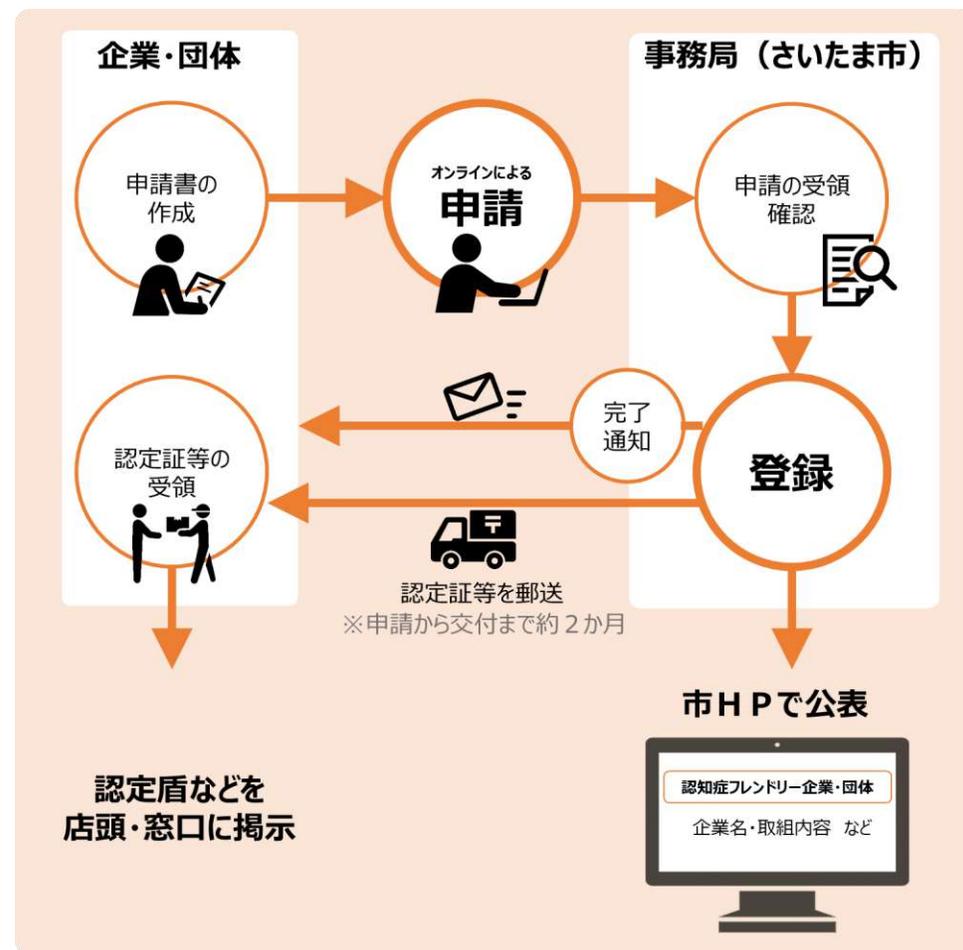
申請の仕方

- 申請は、専用フォームによるオンライン申請のみ

登録後は

- 市HPで登録企業の公表をするほか、登録企業向けに市の認知症関連情報を定期的にメールで配信

申請の流れ



啓発品（フレンドリー企業団体）



▲登録証



▲認定盾



▲ステッカー

チームオレンジWEB・チームオレンジガイドブック

- 制度開始に合わせ、さいたま市チームオレンジWEBを開設しています。

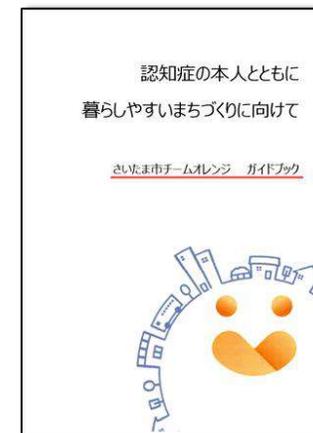
<https://www.city.saitama.jp/002/003/003/004/004/p099677.html>

トップページ > 健康・医療・福祉 > 福祉・介護 > 高齢の方 > 認知症 > チームオレンジ > チームオレンジWEB（メインページ）



▲ チームオレンジweb

- 市民、企業、関係者などに向けて登録や活動を行う際のさいたま市チームオレンジガイドブックを作成しています。
- ガイドブックはチームオレンジWEBからダウンロードできます。
(製本版の配付は1月以降を予定)

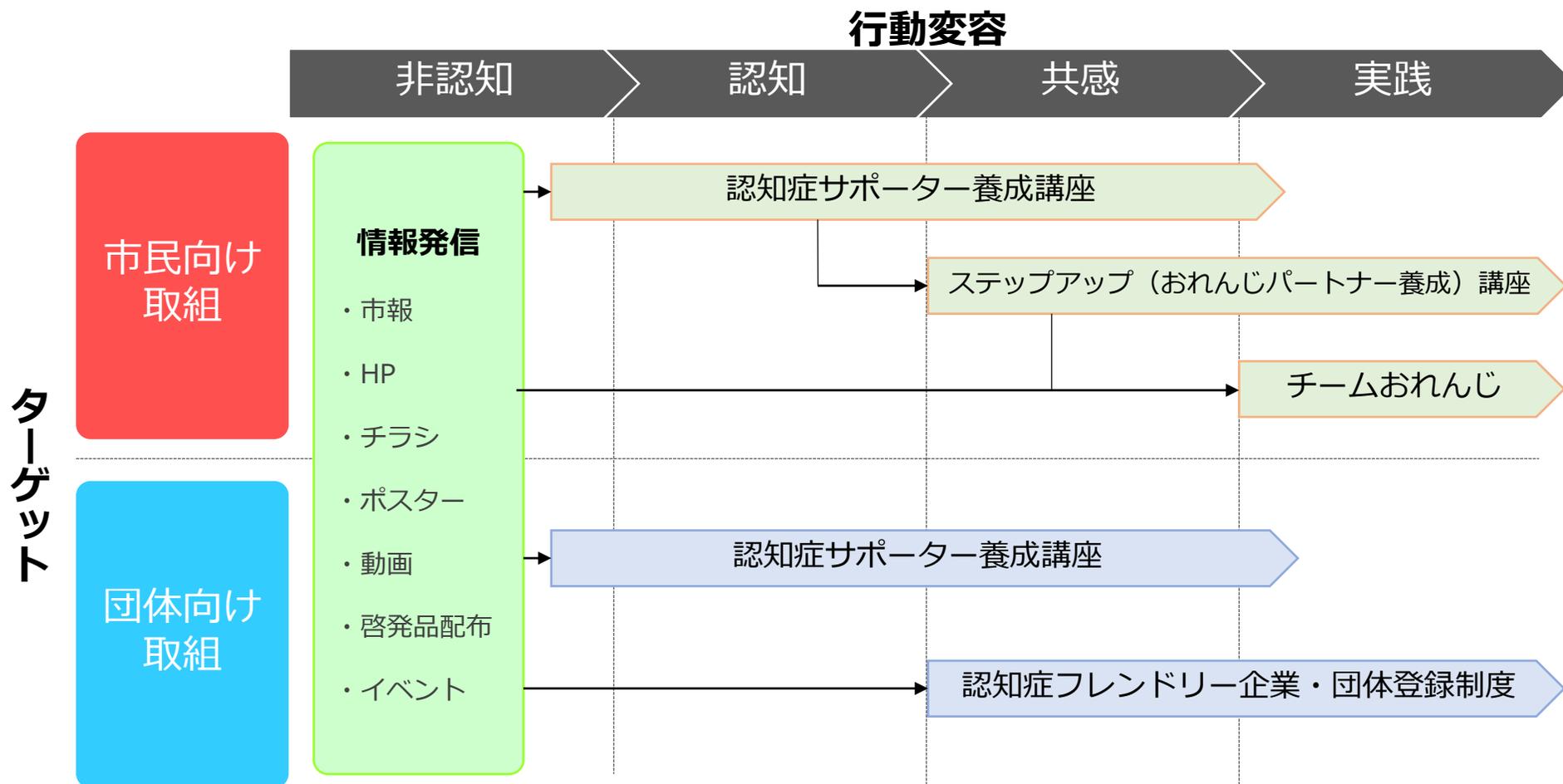


◀ ガイドブック

政策体系（まとめ）

目指す状態

- ・社会が認知症に関する正しい知識及び認知症の人に関する正しい理解を持つ
- ・地域や職域などあらゆる領域で、認知症と共生するまちづくりに資する社会活動が実践されている



dementia

③ 今後の展望

次期認知症施策推進計画について

- 本市では政府方針の認知症施策推進大綱（令和元年度策定）の内容を踏まえ、「共生」と「予防」を基本方針とした**さいたま市認知症施策推進計画を令和2年3月に既に策定済み**
 - 次期認知症施策推進計画（令和6～9年度）においても、認知症基本法の対応として「共生」の考え方をより強く反映する予定
- 他方、認知症の人本人の声や「共生」に重点が置かれた認知症基本法への対応として、本市でも「認知症の人の社会参加支援」や「認知症バリアフリー」、「多様な主体との連携」など、**「共生」に関連する取組をより拡充していく必要性**がある



- **次期認知症施策推進計画では、「基本的考え方」に「共生」の考え方をより強く明示**
- **更にその具体的取組として、さいたま市版チームオレンジの推進により、「共生」の取組をより加速する**

次期認知症施策推進計画の主なポイント

- 認知症当事者の声
- 令和5年6月成立の認知症基本法への対応
「共生社会」の実現に重点
- 認知症高齢者数の現状
認知症の人の増加傾向が続く
- 現行計画の振り返り
認知症サポーター養成者数の停滞、チームオレンジの開始
- 次期計画における指標の設定
計画の進行管理の強化



- 次期計画の**基本的考え方**に「共生」の考え方を反映
- 総合的な施策推進のため、**4つの基本施策**を引き続き堅持
- **主な取組**にて「認知症サポーター等の養成」や「チームオレンジの推進」「本人発信支援」などを拡充
- 「認知症サポーター養成者数」等の**指標**を追加

認知症当事者の声

● 楽しい時間・場所

- ・ 趣味の料理をしている時間
- ・ デイサービスで歌を歌ったり、パズルや塗り絵をして過ごす時間
- ・ ライブやコンサートに行けること
- ・ 孫と遊ぶ時間

● 安心できる時間・場所

- ・ 家で家族と過ごす時間。
- ・ 自分の病気のことを知っている人がいるところは安心していける。
- ・ 何も考えなくてもいい時間
- ・ 自分の部屋が落ち着く

● 緊張する時間・場所

- ・ せかされると緊張する
- ・ 仕事を辞めることは頭がぐちゃぐちゃになっていて、仕事自体が緊張する場所になっていた
- ・ 満員電車
- ・ 家電製品のマニュアルが頭に入ってこない
- ・ 車の運転。知っている場所なのにわからないことがあると不安になる。
- ・ 病院での認知症の検査。

認知症当事者の声

● 信頼できる人はどんな人か

- ・ 話を聞いてくれて親身になってくれる人
- ・ 病気の前から変わらない人（病気が分かっていても態度が変わらない人）
- ・ 病気のことを伝えても親身になってくれる人
- ・ にこやかな人。むすっと
- ・ 挨拶を返してくれる人
- ・ 話すことと行動が一致している人

● 緊張する人・苦手な人

- ・ 声が大きくて早口の人が苦手になっている。
- ・ 時間制限があると緊張する。
- ・ 前と比べて頭が回らなくなっているので、相手が何を求めているのか頭で整理できなくなっている。時間制限があると緊張する。
- ・ 主治医。忙しそうにしているから口をはさんではいけないような気持ちになる。
- ・ 会社で、自分の病気のことを理解して対応してもらおうという考えはあきらめた。

認知症当事者の声

● 元気の秘訣について

- 毎日の運動、趣味を続けること
- 特技を生かしたボランティア活動
- 孫が近くにいるのが秘訣、家族との時間
- 気がめげてしまうこともあるので、短期的な目標を作り動く。目標をこなすのが楽しい。
- 病気の前からやっていたことを続ける
- 家に一人でいるのが好きではない。毎日出かけている。どんどん外に出るようにしている。
- 職場で何もできなく周りの視線がつかった。カミングアウトしたら、同僚たちが親切になった。それでも嫌なひとはいる。

● 身近にあるカフェ（集い）について

- どうにもならないなら楽しくやりたい。知らない人と知り合うことができる。
- 人と話ができる重要な機会
- 自然体でいられる場所（家族）
- 病院の先生に紹介されて感謝している。
- いる人が暖かい。あるがままを受け入れてくれる
- 病気のことあまり気にしないようにしている。自分の状態を確認する場所
- 参加して明るくなった。地域でもボランティアを積極的に参加するようになった。

認知症当事者の声

● 地域（社会）とのつながりについて

- ・ 発症してから、「やらなくていけないことがあること」の大切さを感じる。
- ・ 発症前と発症後のギャップについて、周囲に理解してもらう必要がある。その上で、自然と助け合える環境ができていくといいと思う。
- ・ 障害者のヘルプマーク等のように、認知症を象徴するマークがあると助け合いの環境づくりが促されるのではないかと
思う。
- ・ カミングアウトを職場でした際に、周囲の対応が全く変わってしまった。周りの配慮が過度になってしまい、自身としては「まだやれるのに」という気持ちになってしまうことが多く、周囲に自身のできること、苦手なことなど自身の状況を
知ってもらうことが必要だと感じた。
- ・ 「やりがい」、「成果」が普段の生活にもっとできるといい。発症してから、やったことに対して、何かを感じたり、残るもの
がなく、もどかしく感じることが多い。
- ・ 周囲の親切ありがたい。
- ・ あるがままでいたい。
- ・ 病気のことは伝えていない。まだ、話したくない。その時がくれば、。。
- ・ 仲の良い近所の人には病気のことを伝えた。
- ・ 近所付き合いがあまりない。
- ・ 困った時は人に聞く。周りに人がいなくなってから聞く。

次期認知症施策推進計画（素案）

基本的な考え方

認知症の方の意思が尊重され、できる限り住み慣れた地域の良い環境で自分らしく暮らし続けることができる社会の実現に向けて、認知症の予防から、重度の方への対応、その介護者への対応まで切れ目のない支援に取り組むとともに、認知症の方も社会の一員として活躍ができる「共生」のまちづくりを進めます。

指標

認知症サポーター養成者数

おれんじパートナー養成者数

認知症フレンドリー企業・団体の登録件数

4つの基本施策

1 認知症の人に関する理解の増進等

- ① 認知症サポーター養成講座等の推進
- ② 「認知症ケアパス」作成
- ③ 認知症の日及び月間における普及・啓発イベント等の開催

2 認知症予防に資する可能性のある活動の推進

- ① 介護予防に関する教室や講座の実施
- ② 介護予防の地域づくりに向けた担い手の育成

3 医療・ケア・介護サービス・介護者への支援

- ① 認知症疾患医療センター
- ② 認知症初期集中支援チームの活用
- ③ 医療従事者・介護従事者の認知症対応力の向上
- ④ 認知症地域支援推進員の配置
- ⑤ もの忘れ検診の推進
- ⑥ 認知症対策推進事業
- ⑦ 認知症情報共有パスの提供
- ⑧ 認知症相談の実施
- ⑨ 介護者が集い、相談できる場の確保

4 認知症バリアフリーの推進・若年性認知症の人の支援・社会参加支援

- ① チームオレンジの推進
- ② 本人発信支援
- ③ 認知症高齢者等に対する見守りの推進
- ④ 若年性認知症支援コーディネーターの活動の拡充

認知症フレンドリーまちづくりセンター設置案

目的

さいたま市版チームオレンジをはじめとした認知症と共生するまちづくりに資する取組や情報を集約。市民や企業、関係団体と協働しながら、認知症の人も自分らしく暮らせる社会環境を創出するために、**認知症の人本人も含めた多様な主体がまちづくりに参画し連携を促進する拠点**を設置。（**中間支援組織**としての位置づけ）。

- ▶ 多様な主体を巻き込むネットワーキングと活動支援のため、センターにコーディネーターを設置

概要

運営：委託業務

場所：与野本町デイサービス（中央区本町東）

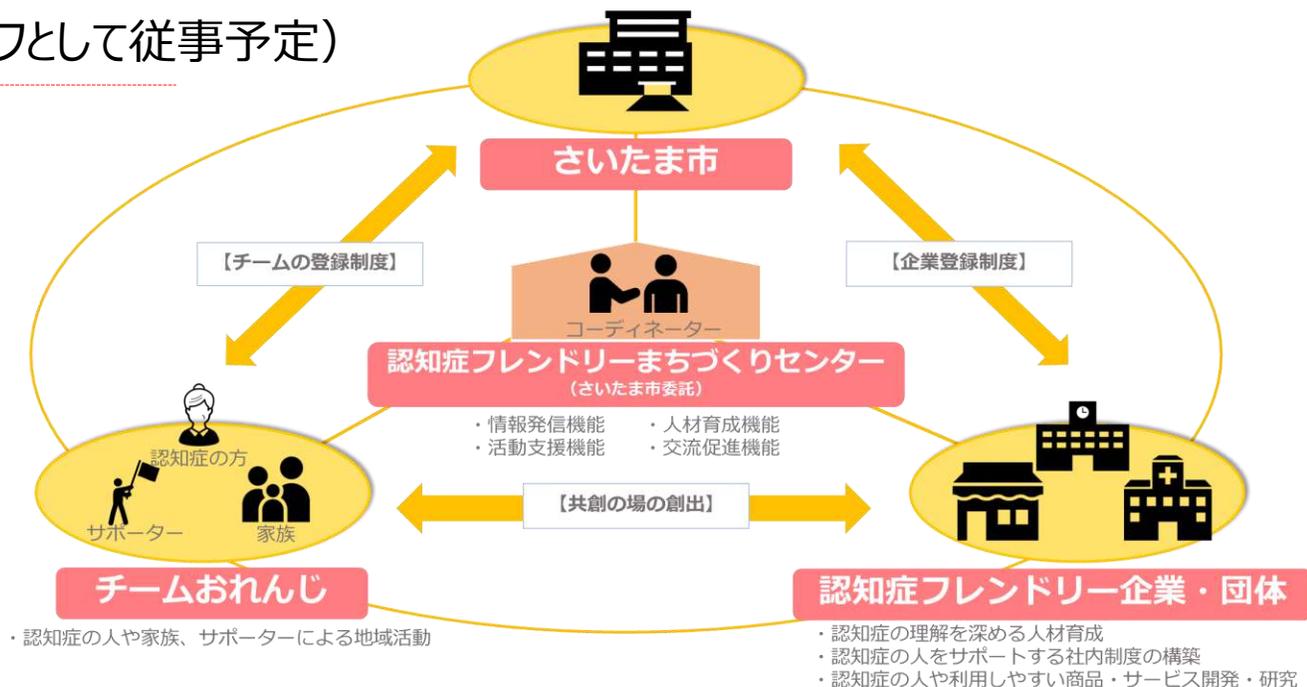
時期：令和6年7月を目途に開設

体制：コーディネーター、事務員（認知症の人もスタッフとして従事予定）

（認知症当事者、企業、行政の連携を促進するハブ的機能を想定）

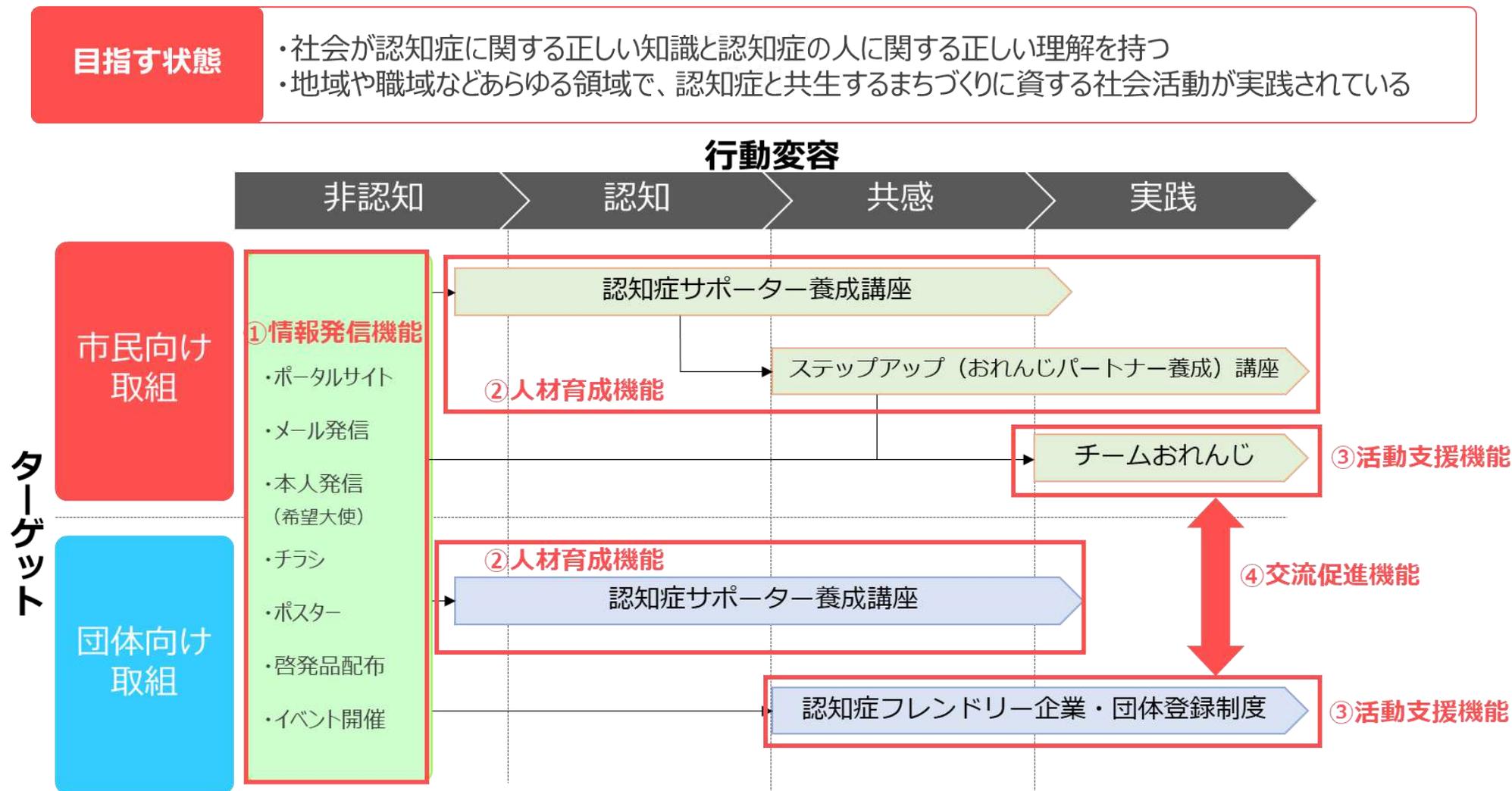
▼イメージ図

- ①情報発信機能** 認知症に関する最新情報の集約・発信
 - ✓ 最新の知見、イベント、地域活動、企業の取組をワンストップで発信
 - ✓ 専用ポータルサイトのほか、メール配信によるプッシュ型の広報
- ②人材育成機能** 認知症の理解や実践を促す講座・研修
 - ✓ 市民向け、家族介護者、企業向けの研修の企画・運営
 - ✓ 専門的知見を有したコーディネーターによる講座プログラムの開発
- ③活動支援機能** 社会参加・サービス創出支援
 - ✓ 一般市民向け：地域のサポーターチーム結成支援
 - ✓ 企業・団体向け：認知症の人にやさしいサービスの開発相談支援
- ④交流促進機能** 認知症の人と企業・団体の交流支援
 - ✓ 認知症の人（チーム）のニーズと企業・団体の資源のマッチング



センターの機能の考え方

- 行動変容の過程に合わせ、一貫性をもった取組としてセンターに4つの機能をもたせることで、取組効果を最大限発揮。

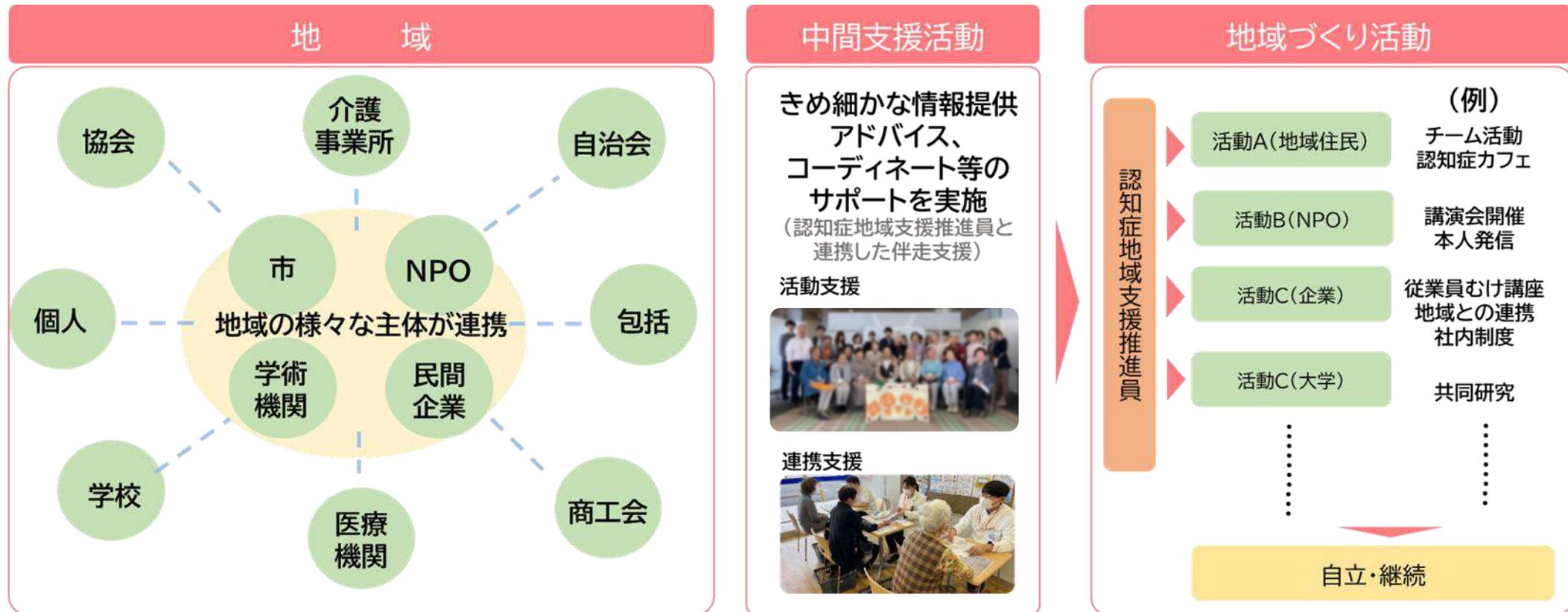


地域と行政をつなぐ中間支援活動

中間支援活動とは：様々な地域づくり活動に取り組む担い手の自立・継続に向けて、担い手が必要とする情報の提供やアドバイス、商品やサービス開発において必要となる専門家や事業者等のマッチング、コーディネート等を行うなど、担い手に寄り添い、伴走型で支援を行うことを中間支援活動と呼んでいます

(国土交通省作成：中間支援ガイドブックより)

中間支援のイメージ図



▲国土交通省「中間支援ガイドブック」を基に作成

今後の方向性

● 本人の視点に立った施策の推進(本人発信の拡充)

- ✓ 本人の居場所づくり・本人ミーティング開催支援
- ✓ 認知症本人大使の設置
- ✓ 施策検討委員会における本人の参画 など

● 情報発信・普及啓発の取組

- ✓ あらゆる領域での認知症サポーター、おれんじパートナー、キャラバンメイト養成の拡充と活動支援
- ✓ ポータルサイトの開設
- ✓ プッシュ型の広報
- ✓ 周知啓発イベントや講演会の企画・実施 など

● 公民連携の推進

- ✓ フレンドリー企業・団体登録件数の向上
- ✓ 産学官による共創の場構築支援
- ✓ 政策アドバイザー設置 など

dementia

④

おわりに

担当としての雑感

- チームオレンジは、認知症の人への支援のための「仕組み」というより、認知症の人が地域に参画するための「理念」やそれを地域に浸透していくための「装置」に近いイメージ
- 認知症の人も含めて、地域の多くの方に参加してもらうには、「楽しい場作り」の演出が大事
 - 「エンタメ」や「レジャー」視点の要素を取り入れたチームづくりも必要？
- 既存事業との連携の視点も重要
 - チームオレンジの考え方の各事業への浸透
- 政策効果をより打ち出しできるような検証手法の確立（エビデンスづくり）
 - 「認知症にやさしいまち」≒「認知症の人の暮らしやすさ」の指標とは？
- 関係機関や支援者の業務負担の問題
 - 認知症地域支援推進員（チームオレンジコーディネーター）へのサポートの拡充の必要性
- 企業・団体との連携には、社会貢献の側面だけではなく、企業の事業継続の観点におけるメリットの打ち出し
 - 認知症の人が暮らしやすい社会環境の変化を進めていくには、認知症にやさしいサービス、製品開発も重要

既存事業との連携

住民主体の通いの場

生活支援体制整備

チームオレンジ

概要

地域の住民同士が気軽に集い、一緒に活動内容を企画し、ふれあいを通して「生きがいづくり」「仲間づくり」の輪を広げる地域の介護予防の拠点。

地域住民に身近な存在である市町村が中心となって、生活支援サービスを担う多様な事業主体と連携しながら、日常生活上の支援体制の充実・強化及び高齢者の社会参加を一体的に図る。

認知症と思われる初期の段階から、心理面・生活面の支援として、市町村がコーディネーターを配置し、地域において把握した認知症の方の悩みや家族の身近な生活支援ニーズ等と認知症サポーターを中心とした支援者をつなぐ仕組み

機能
(活動内容)

【社会参加促進】ボランティア、茶話会、趣味活動、就労的活動、多世代交流等
【運動機能向上】体操等
【低栄養予防】会食等
【口腔機能向上】体操等
【認知機能低下予防】多様な学びのプログラム

【生活支援・介護予防サービス】
地域サロンの開催、見守り安否確認、外出支援、買い物・調理・掃除などの家事支援、介護者支援等
【高齢者の社会参加】
一般就労・起業、健康づくり活動、地域活動、介護福祉以外のボランティア活動

【認知症の人の生活支援・社会参加支援】
見守り、声かけ、話相手、外出支援、ボランティア訪問等、孤立しないための関係づくり（認知症カフェの動向、運営参加）、専門職へのつなぎ、必要な窓口の紹介等

・既存グループに所属する人が認知症と診断された場合の継続的な活動
= チームオレンジの機能も持ち合わせる

互換的關係

・認知症の人の新たな活動の場
= 認知症本人も含めた誰でも参加できる場作り

チームオレンジの理念の浸透と拡散が必要

ご清聴ありがとうございました。